

埼玉育ちのグローバル人

山あり谷あり、自分と向き合う海外生活

第3回 「シカゴ留学で開けた国際協力への道」



SAITAMA

埼玉県マスコット「コバトン」

平成30年度「埼玉発世界行き」奨学生

鶴山 えりかさん



こんにちは、鶴山えりかです。最終回の今回はシカゴでの留學生活についてお話したいと思います。

2018年8月から2020年6月まで、米国のシカゴ大学に留學し、修士号を取得しました。合格通知を受け取った時は、嬉しさよりも驚きの方が大きく、頭の良い人ばかりが集まる大学でやっていけるか不安が募るばかりでしたが、運良く埼玉県と世界銀行の奨学生として選ばれたことは、合格通知にさらに太鼓判を押してもらった思いでした。

専攻は公共政策。高校時代から抱き続け、インド生活で膨らんだ国際協力への思いを形にすべく、必死で勉強しました。経済学と統計学を中心にエビデンスに基づく政策作りを学び、プログラミング言語を用いたデータ分析スキルを身につけました。大学院生活は予想外に大変で、打ちのめさされそうになることもしばしば。初めて学ぶことがほとんどの上に宿題は膨大。睡眠時間を削ることはしませんでした。休みの日も関係なく図書館に足繁く通い、友人からは「図書館の虫」と言われるほど、図書館は私の居場所になりました。

1年目が終わった夏休み、ほとんどの学生はインターンシップをします。私はバングラデシュの世界銀行でインターンとして2ヶ月間、高等教育のプロジェクトに関わりました。これが私にとって初めての国際機関での経験となり、卒業後も国際機関を目指す意思を再度固めました。

2年目の2学期が終わった春休みには米国でもコ

ロナが流行し始め、大学院生活最後の学期は全てオンライン授業に移行し、卒業式も中止。2年生にとっては就職活動の時期でもあり、ほとんどの学生が職探しに苦戦しました。私は国際機関を視野に就活をしていましたが、面接で落ちることもあり、なかなかうまくいかない日々が数ヶ月続いていました。そのような中で、日本政府が資金援助する国際連合のプログラムに関する募集を見つけました。コロナ渦中の途上国で経済復興を支援する目的で立ち上がったプログラムで、私は東ティモールというアジアの国のUNICEF（国連児童基金）に派遣されることが決まりました。派遣が決まった時は「ようやく国際協力のスタートラインに立った」という思いと、高校時代から抱き続けた漠然とした夢が現実になりつつあるということに心を躍らせました。



東ティモールは2002年にインドネシアから独立したまだ若い国で、多くの面で国際援助が欠かせない国です。現在コロナの新規感染者はゼロですが、世界規模のパンデミックは同国経済にも大きな爪痕を残しています。UNICEFの一員として、少しでも東ティモールの発展に寄与できるよう尽力していきたいと思っています。



東ティモール首都ディリにあるキリスト像

ここでは書ききれないことばかりですが、多くの人の協力を得て多くのことを経験させていただき、ここまですることができました。そして、国際協力の道はまだ始まったばかり。常に今抱いている初心を忘れずに、これからも恵まれない国とその国の子供たちのために自分ができることから一步一步進んでいきます。